慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	モダニズム前史またはトマス・サージェント・ペリーの場合 ; 質疑 ; 応答
Sub Title	Before the dawn of modernism : in the case of Thomas Sergeant Perry ; Question ; Answer
Author	巽, 孝之(Tatsumi, Takayuki) 粂川, 麻里生(Kumekawa, Mario) 小平, 麻衣子(Odaira, Maiko) 吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke) 小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.120, (2021. 6) ,p.81 (160)- 106 (135)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2020年度藝文学会シンポジウム「文学と歴史」 開催日: 2020年12月11日 オンライン (Zoom) 開催
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01200001-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モダニズム前史
またはトマス・サージェント・ペリーの場合

巽　孝之

0. 文学と歴史の三題噺

私はかれこれ四半世紀ほど、大学院の講義科目「文芸批評史」を教えてきたのですが、教科書には二十世紀初頭の構造主義言語学やロシア・フォルマリスムから二十世紀末の文化研究までをカバーするロングマン社のアンソロジー *Contemporary Literary Criticism* を使い、代表的批評家のテクストを一つ一つ読んできました。さて、全9章からなるこのアンソロジーの第7章に「歴史批評」（Historical Criticism）というセクションがあり、ミハイル・バフチンからレイモンド・ウィリアムズ、スティーヴン・グリーンブラット、ナンシー・アームストロングに及ぶテクストが収録されているのですが、その時には必ず、いわゆる新しい歴史学の代表作が文学作品、さらには映画作品と連動した実例として、必ず三題噺をするようにしています。

一つは、イタリアの新しい歴史学者カルロ・ギンズブルクが16世紀イタリアの異端審問の言説構造を浮き彫りにした『チーズとうじ虫』（1976年）と同じくイタリアの学匠作家ウンベルト・エーコの長編小説『薔薇の名前』（1984年）の取り合わせ。もう一つはフランスの歴史学者アラン・コルバンがこれまで歴史があるなどとは思われなかった嗅覚がいかに近代化によって飼い慣らされたかを検証した『においの歴史』とドイツ作家パトリック・ジュースキントの長編小説『香水』（1985年）の取り合わせ、そして三つ目はアメリカの歴史学者ナタリー・デイヴィスが16世紀フランスの農夫が失踪後に帰還した際に別人と入れ替わっていたにもかかわらずそれを元の妻が受け入れたという詐欺事件を分析した『マ

ルタン・ゲールの帰還』（1983 年）とリチャード・ギア、ジョディ・フォスターが主演して舞台を 19 世紀アメリカの南北戦争に置き換えたハリウッド映画『ジャック・サマーズビー』（1993 年）の取り合わせ。

いずれも、優れた歴史学の名著というのは小説をも触発するし映像になっても面白いことを証明した取り合わせです。そしてそれは、ヨーロッパの新しい歴史学やアメリカの新歴史主義批評が前提にしてきたように、文学が歴史的な事実を巧みにテクスト化する以上に、歴史もまた文学に負けず劣らずレトリカルな産物であることを裏書きするでしょう。そこにこそミシェル・フーコー以降の歴史学の面白さがあります。そして、文学と歴史のそうした相互交渉が意味を持つようになったのは、例えばギンズブルクやエーコはルネッサンスという歴史的転換点を扱いましたが、コルバンやジュースキントはフランス革命という歴史的転換点を、そしてデイヴィスの影響を受けたリチャード・ギアらは南北戦争という歴史的転換点を扱っているからです。歴史的転換点では、いつも物語が発生する可能性が高まります。

1. 福沢諭吉の歴史的転換点

このような構図を我が国に当てはめるなら、やはり筆頭に来る歴史的転換点は、関ヶ原の合戦に象徴される戦国時代の後半か、そうでなければマシュー・ペリー提督率いるアメリカの黒船によって開国を迫られた日本が迎える明治維新でしょう。実際、NHK の大河ドラマでも、戦国時代と明治維新を扱う頻度は極めて高いものです。

こうした歴史的転換点は、慶應義塾の起源とも無縁ではありません。福澤諭吉はマシュー・ペリー提督（1794-1858 年）率いる黒船によって我が国が開国を迫られたのちに、1860 年と 1867 年の二回にわたって、勝海舟（1823-1899 年）らと共に咸臨丸で渡米していますが、その第一回訪米のさいに、中浜万次郎（ジョン万次郎、1827-1898 年）とともに購入したのが、コネティカットの才人の一人ノア・ウェブスター編纂による 1859 年発行の英語辞典 *A Pronouncing and Defining Dictionary of the English Language* であり、のちに彼はそれを座右に置きつつてトマス・ジェファソン起草になる「独立宣言」（1776 年）の本邦初の訳業（『西洋事情』（1866 年所収）をこなします。そのなかでジェファソンの殺し文句

「すべての人間は平等である」“All men are created equal” を「天の人を生ずるは億兆皆同一撤にて」と訳しましたが、これが同時に「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといえり」なる名文にアレンジされてのちの『学問のすゝめ』（1872 年）冒頭に置かれ、同書は 70 万部を超す大ベストセラーとなり、アメリカ民主主義精神の極東における普及に大きく貢献しました。

このようにアメリカ経由で洋学の真髄を吸収した福澤は、南北戦争に対応するかのように我が国で起こった戊辰戦争の時に、毅然とした態度を貫きます。

時は、慶應 4 年（1868 年）の 5 月 15 日。維新政府軍と旧幕府派の対立がエスカレートしたあげく戊辰戦争が勃発し、官軍と上野彰義隊の戦いを迎えた江戸市中が混乱をきわめていたさなか。

場所は、福沢諭吉（1835-1901 年）がそれまで十年間やってきた私塾を芝新銭座（現在の港区浜松町）の有馬家控屋敷跡に移転し、年号にちなんで「慶應義塾」と命名した近代私学の教室。

町全体に砲声と怒号が響きわたり、一切の店舗は店じまいして、町民はいくさのゆくえを固唾を飲んで見守るばかり。『福翁自伝』（1899 年）もこう伝えています。「芝居も寄席も見世物も料理茶屋もみな休んでしまって、八百八町は真の闇（やみ）、何が何やらわからないほど」。

ところが、このような時代を記述しつつも、その混沌のまっただなかで福沢自身が何をやっていたかというと、そうした世間の騒擾に一切心動かされることなく、いつもと変わらず土曜日の日課である北米の代表的経済学者にしてブラウン大学学長も務めたフランシス・ウェーランド（1796-1855 年）の経済書『政治経済の諸要素』(Francis Wayland, *The Elements of Political Economy*, 1866) を講述する授業を平然と続けていたのです。いうまでもなく、現在の大学キャンパスではないから、教室と言っても畳張の座敷であり、小さな書見台を前にした羽織袴の福沢が、一人洋書を右手に携え、朗々とその内容を塾生たちに説いている。その背後の窓の外には、上野の方角にもくもくと立ち上る砲煙が見えるが、福沢は振り向こうともしない。塾生たちはと言えば、やはり羽織袴姿で、小さな机を前に、講義にじっと耳を傾けています（図 1）。あるいは、机に広げた帳面に先生の講義内容を書きつけているのかもしれません。

世の中は一国の行く末を左右する歴史的騒乱に揺れ動いているというのに、それをよそに黙々と授業を続けるとは、まことに能天気な風景だと思うでしょう

図 1

か。しかし、まさにこの時の福沢の姿こそは、それは、世の中にたとえいかなる変動があっても、慶應義塾の存する限り、わが国における学問の命脈が絶えることはないことを象徴するエピソードとして、長く語り継がれてきました。それを記念して、1954 年 からは 5 月 15 日は「ウェーランド経済書講述記念日」と定められ、戊辰戦争下の福沢を見習いつつ、毎年三田演説館で記念講演会が開かれています。昨今では日本学術会議の会員任命拒否問題で政界と学界が対立して大論争を巻き起こしていますが、本塾における 5 月 15 日は、いかなる災厄の下にあっても保証されるべき「学問の自由」の記念日にほかなりません。

実際、福沢本人が「学問の独立」(1883 年) という論考の中でこう説いています。「元来学問は、他の武芸または美術等に等しく、まったく政治に関心を持たず、いかなる主義の者にてもただその学術を教授するの技倆ある者にさえあれば教員として妨げなきはず」。そのようなヴィジョンを抱くがゆえに、1873 年、福沢は日本最初の学術団体「明六社」の発足に参加し、1879 年には日本学士院の原型たる東京学士会院初代会長を務め、1880 年には日本初の社交クラブ「交詢社」を設立しました。それらはいずれも近代日本が西欧先進国と伍するために学問の独立すなわち自立性を確保するための制度づくりでした。

2. ハーバート・スペンサーと明治日本

このように説明してくると、あたかも福澤が学問を歴史的趨勢の影響を受けないところに定めているように聞こえますが、しかし我が国に近代をもたらした人物ですから、国家の将来をめぐるヴィジョンがないわけがなく、明治十年代の日本が盛んに取り入れたハーバート・スペンサー (1820-1903 年) の社会進化論についても、明六社同人の森有礼や加藤弘之ら同様、深く親しんでいました。福澤

は 1875 年にはスペンサーの『社会学研究』を読了していますが、それに先立つ 1874 年にはすでに自身の『学問のすすめ』第四編「学者の職分を論ず」においてスペンサー的「力の平衡」理論（Equilibration）を思わせる「力の平均」という説を唱えているので、間接的にせよ 1873 年あたりにはもうスペンサーの社会進化論に馴染んでいた可能性が高いものと考えられます。社会進化論は生物学的有機体説を社会や国家に適用したところに特徴がありますが、明治の知識人たちはそこに近代国家ならではの歴史的ヴィジョンを見出したのでした。今日の我々はフーコー的な歴史観に慣れきっていますが、明治日本においてはスペンサー的な歴史観が国民に広く訴えかけるものだったのです。

かくして、福沢の近代的ヴィジョンを反映した洋学のメッカたる慶應義塾は 1890 年に大学部を設置して欧米の大学と提携したのちには、外国人教師を少なからず招聘するようになります。慶應義塾は、当初は英国国教会系のイギリス人学者に焦点を当てていたのですが、やがて福沢が米国ユニテリアン系とのコネクションを固めると、宣教師アーサー・M・ナップに人選を委託するようになり、その結果、ハーバード大学総長チャールズ・エリオット（1834-1926 年）の人選により、初代文学科主任はブラウン大学出身のウィリアム・シールド・リスカムに決まります。彼の授業は 1890 年から病気で帰国する 1893 年まで続き、そのあとをイギリス国教会系でケンブリッジ大学出身のアーサー・ロイドが引き継ぎます。

当時の授業に関する資料はほとんど散逸しているものの、しかし、とある文学史上重要な人物による印象記が残っています。それは、1891 年に慶應義塾大学部に入学し、のちに国際詩人として令名を馳せる野口米次郎（ヨネ・ノグチ）によるものです。彼は当時の慶應義塾でイギリスの哲学者ハーバート・スペンサー（1820-1903 年）の『教育論』（1861 年）やアメリカ合衆国史、それにイギリス作家トマス・カーライル（1795-1881 年）の『英雄と英雄崇拝』（1841 年）などを学び感銘を受けたと述懐しました。彼は 1893 年には渡米してしまうので、文学科で習ったとすればリスカム教授の授業だったかもしれません。しかし、このデータからだけでも、当時のカリキュラムにおいて、ドイツ・ロマン派の精神を継ぎアメリカ・ロマン派のエマソンにも影響を与えたカーライルの代表作と、社会進化論者として明治日本の自由民権運動を刺激したスペンサーの代表作を学生に学ばせたことの教育的意義が窺われるでしょう。

3. 慶應義塾初の英米文学史教授トマス・サージェント・ペリー

図 2

けれども、慶應義塾が英米文学史を受容するにあたって重要なのは、むしろ野口が渡米した後の1898 年に、福沢がハーバード大学総長エリオットへの書簡で英文学の専門家を要請し、それに応じて、何と前掲ペリー提督の甥の子にあたるアメリカ文学者トマス・サージェント・ペリー（1845-1928 年）が慶應義塾へ派遣されたことではなかったでしょうか（図 2）。 1898 年 1 月、福沢自身と、当時すでに慶應義塾に長く勤めていたハーバード大学出身の経済学者ギャレット・エドワーズがそれぞれエリオット総長に「慶應義塾の英文学教授」を推薦してほしいと丁重な書状をしたため、その結果、5 月から始まる新学期に合わせて、ペリー教授一家の来日が実現しました。その来日についてエドワーズはエリオット総長に対し「ペリー氏はまだあまり日本との接触がありませんが、大変気に入っているようです。新しいものばかりで感動し、鼻を窓に押し付けて行列の行進を見ている子供のようだと自分で言っています」と綴り（同年 5 月 5 日）、福沢も同総長に「我々は彼に好感を持っており、このような実力のある優秀な学者を得たことを誇りに思っております」と書き送っています（同年 6 月 9 日）。当時は日本開国の意義が高く評価されており、ペリー提督の銅像を横浜に建立する計画も持ち上がっていたため、その甥の子は来日する前から、一種の国際的セレブとしての名声と歓待が保証されていました。じっさい、来日早々、ペリー教授に対しては、伊藤博文初代総理大臣や錚々たる貴族たち、国会議員たちなど社会的地位のある人々三百名ほどを集めた来日歓迎ガーデンパーティが催されています。

けれども、彼は必ずしも慶應義塾の望んだ「該博な文学者よりも役に立つ英語を面白く教えられる先生」（“rather a practical and interesting teacher than a profound scholar” 106）（ドロッパースからエリオット総長への手紙、1898 年 1 月 26 日付）に当てはまるとは言い切れない「本の虫」でした。彼の来日は、むしろボストン上流階級（Boston Brahmin［ボストン・ブラーミン］）の出身であるばかりか印象派を代表するクロード・モネの直弟子にあたる画家であった妻リー

ラ・キャボット・ペリーのためにこそ、大きな意味を帯びたと推察されます（図 3）。

図 3

もちろん、アメリカ合衆国はその出発時点から「世界最初の民主主義の実験場」だったわけですから、原理的に階級というものは存在しえないことになっています。ところが、独立戦争に勝利した時、初代大統領ジョージ・ワシントンを皇帝にしようという動きがあったのは事実ですし、第二代大統領ジョン・アダムズに至っては、その息子ジョン・クインシー・アダムズが第六代大統領になるなど、なんと大統領職を世襲しています。この民主主義国家にはその当初から、世襲制をも含めた貴族主義的なところがあり、こうした矛盾はのちに「ボストン・ブラーミン」の名前で呼ばれる民主主義国家内部の貴族階級の成立を促すことになります。

では、アメリカを代表する貴族階級内部でペリー教授の妻リーラがいかに高い地位を占めていたのか、以下の有名な詩を読めば一目瞭然でしょう。

Here's to dear old Boston,
Home of the bean and the Cod
Where the Lowells speak only to the Cabots,
And the Cabots speak only to God
古き良きボストンへ乾杯！
この地こそは豆と鱈のふるさと
そこではローエル家はキャボット家のみに語りかけ、
そしてキャボット家は神のみに語りかける

ボストン・ブラーミンの名で親しまれるアメリカの貴族階級は莫大な財産を受け継いでいるばかりか、その大半がハーバード大学に関わっているというインテリ一族です。その主要メンバーには、アメリカの国民詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー（1807-82 年）やボストン美術館の日本美術収蔵「ビゲロ

ー・コレクション」の名で世界的に知られるウィリアム・スタージス・ビゲロウ（1850-1926 年）、名探偵シャーロック・ホームズのモデルとなる医学者作家オリバー・ウェンデル・ホームズ（1809-04 年）、それに子孫には高名な天文学者や詩人も含むジェイムズ・ラッセル・ローエル（1819-91 年）などが含まれていました。その中でもチャールズ川やメリマック川の水力を利用した紡績会社で莫大な富を築き、その業績を称えて町の名前にすらなっているローエル家の輝かしい歴史を知らない者はいません。けれども、そのローエル家ですら敵わない、神に一番近いとされるのがキャボット家であり、トマス・サージェント・ペリーはまさにそのキャボット家の令嬢と結婚したのです。

ペリー本人は、1845 年に北米東海岸ロード・アイランド州ニューポートで生まれました。前述の通り、大伯父には黒船で有名なマシュー・ペリー提督が、母方の高祖父には建国の父祖ベンジャミン・フランクリンがいるという、彼自身が名門の出身です。 16 歳でハーバード大学に入学し、フランスとドイツに留学。帰国後 1868 年から母校でフランス語とドイツ語を教えながら、アメリカ初の文芸雑誌〈ノース・アメリカン・レビュー〉の編集部に入り、超越主義思想家ラルフ・ウォルドー・エマソンや当時のアメリカ文壇の中心とも言える国民詩人ロングフェローらが創刊した月刊文芸誌〈アトランティック・マンスリー〉や革新主義的週刊誌〈ネイション〉といった一流メディアでも健筆をふるいました。若干 20 代の若者が英米はもちろん仏独露の文学を自由自在に紹介し論評する新進文芸評論家として 華々しくデビューしたのです。

当時といえば、1868 年にボストンの文学仲間による「ザ・クラブ」が発足した頃でした。これはかつてエマソンやロングフェロー、ホームズ、ローエルらボストン上流階級（ブラーミン）に属する文学者たちが毎週土曜日に開いていた晩餐会「サタデイ・クラブ」の系統に属し、その一世代下の若手たちから成る集まりです。そもそもペリーが編集担当する前掲〈アトランティック・マンスリー〉にしても、もともとは「サタデイ・クラブ」がその機関誌として 1857 年に創刊したものでした。彼はこの「ザ・クラブ」で、幼なじみの哲学者ウィリアム・ジェイムズ（1842-1910 年）と小説家ヘンリー・ジェイムズ（1843-1916 年）の兄弟やリアリズム文壇の学部長（ディーン）なる異名を取るウィリアム・ディーン・ハウェルズ（1837-1920 年）、曾祖父と祖父にアメリカ合衆国大統領を持つ歴史家ヘンリー・アダムズ（1838-1918 年）ら綺羅星のごとき顔ぶれとの談論風発を楽しんでいました。

そして、この仲間の中でもペリーの読書量が群を抜いていたことは、1871年から81年のあいだに 英米仏独露に及ぶ文学書744冊を書評していることからもわかるでしょう。その圧倒的な読書力、転じては「本の虫」ぶりは友人のヘンリー・ジェイムズやホームズが太鼓判を押すところであり、その批評眼においても、マーク・トウェインを発見し、大御所ハウェルズにフランス作家バルザックやフロベール、ドーデ、イギリス作家ジョージ・エリオット、ロシア作家ツルゲーネフを勧め、二十世紀になってからは自らロシア語を学んでトルストイ、ドストエフスキー、それにチェーホフを原文で読みこなすに至っています。

しかし、1877年にハーバード大学の英文学講師となるも、凡庸な上司アダムズ・シャーマン・ヒル教授（1833-1910年）との人間関係がうまく行かなかったがために1881年には契約更新されず、チャールズ・エリオット総長もそれに異議を唱えませんでした。かくしてペリーはハーバード大学を辞する…というか追い出されることになるのですが、友人たちの厚意で基金が成立し、1881年から82年まで、彼は大学の教室を借りて無料講義を行い、それを元に主著『18世紀英文学』（1883年）を刊行。以後も『オビッツからレッシングまで』（1885年）、『スノッブの進化』（1887年）、『ギリシャ文学史』（1890年）など重厚な研究書を続々世に問います。時にこの世紀転換期はハムリン・ガーランド（1860-1940年）やジャック・ロンドン（1876-1916年）、フランク・ノリス（1870-1902年）、シオドア・ドライサー（1871-1945年）などダーウィン進化論やニーチェの生の哲学を吸収した自然主義作家が輩出した時代であり、その傾向は文学研究においても無縁ではありません。ペリーはスペンサー譲りの社会進化論を応用し、ロマンティシズム的な天才論を排して文学もまた一定の法則で進化するものと考え、先行するイギリス人学者レズリー・スティーヴンの『十八世紀英国思想史』（1876年）などの進化論的文学史の成果を貪欲に取り入れました。ペリーはまさにダーウィニズムと手に手を取ったリアリズム、自然主義文学と伴走する学者批評家であり、さらに画家である妻リーラがエマソン的超越主義の影響を受けながらモネを代表とする印象主義を自家薬籠中のものにしていたとなれば、モダニズムまであと一歩の地点まで来ていたのです。

ここで、具体的に『18世紀英文学』を紐解いてみましょう。同書はジョン・ダンら形而上詩人からコールリッジやワーズワスらロマン派詩人までをカバーした書物ですが、ページを開けてまず注目されるのは、北米においてダーウィンや

スペンサーの影響を受けた進化論的歴史哲学者ジョン・フィスク（1842-1901）への献辞があることです。「ジョン・フィスクへ謹んで本書を捧ぐ── 彼が示してくれた友情と模範こそは私の励ましとなった」。

そしてその序文には、しかるべき作家たちはたくさんいるにもかかわらず、例えば詩人のマシュー・プライアー（1664-1721）や作家トバイアス・スモレット（1721-71）にはちらりと触れているに過ぎないし、近代小説の父ヘンリー・フィールディング（1707-54）についても十分な議論を尽くせなかったという言い訳が述べられ、その後にこう書かれています。

> My aim, however, has been rather to supplement the histories by pointing out, so far as I could, the more evident laws that govern literature. I have accordingly tried to show the principles that went to the formation of the literature of the last century, and also the causes of its overthrow. Many will doubtless be unwilling to subscribe to the belief that letters are controlled by laws. Mrs. Oliphant, a writer who deserves and receives the respect of all her many readers, affirms, in her admirable "Literary History of England in the End of the Eighteenth and the Beginning of the nineteenth Century" (i.7 and 8), that "every singer is a new miracle --- created if nothing else is created --- no growth developed out of precedent poets, but something sprung from an impulse which is not reducible to law." If this statement is correct, literature forms a singular exception to what has seemed a universal rule. When we consider Mrs. Oliphant's delightful novels we find them occupying a normal position in the development of fiction, with their exact drawing of life and avoidance of direct moral teaching. (vi-vii)
>
> とはいえ私が本書で目論むのは、さまざまな歴史観を補充するのに、文学を統御する明らかな法則を可能な限り指摘することであった。したがって、私がここで示そうとした諸原理は一体どのように 前世紀の文学がいかに形成され、いかに崩壊したかを物語る。もちろん、文学が何らかの法則によって支配されているなどという信念など受け入れがたいと仰る方々も少なくあるまい。だが、例えば多くの読者から当然の如く称賛されてやまないオリファント夫人（Margaret Oliphant Wilson, 1828-97）の名著『18 世紀末から 19 世紀初頭までの英文学史』を開くと、そこにはこう書かれている。「どんな詩

人も新しい奇跡なのだ――少なくとも奇跡として生み出されたのだ――先行詩人の恩恵に預かることなく、その才能は法則では図りがたい衝動からもたらされたのである」。さて、もしもオリファント夫人のこの発言が正しいとするなら、文学は普遍法則には一切従わない例外ということになる。だが、オリファント夫人自身の傑作長編小説に目を転じるならば、その作品群は全て、精密なる人生の描写と直截的な教訓の回避によって、小説史においてしかるべき位置を占めているのが了解されるのである。

（ペリー『18 世紀英文学史』6-7 頁）

スコットランド作家オリファント夫人の文学観がロマン派的天才像を前提に文学例外主義を展開していたとすれば、ペリーはスペンサーやフィスクの影響の下、リアリズム的な文学進化論的歴史観を標榜し、文学が一定の法則に支配された上で発展していくのを疑っていません。ドナルド・パイザーもそのペリー論で述べるように、スペンサー流の「散漫な同質性（incoherent homogeneity）から集結的な異質性 (coherent heterogeneity) へ」という進化論的歴史観は、まさにペリーが文学史に適用していた考え方でした。

それ以降、大学からもジャーナリズムからも身を引いた後のペリーは、画家である妻と共に、フランスのモネの隣人として夏を過ごすことが増えます。

そんな生活がいつまでも続くかと思われた 1898 年に、久々に接触してきたハーバード大学のチャールズ・エリオット総長から日本行きの誘いがあり、しかも妻は日本美術に影響を受けた印象主義画家を師匠と仰いでいたのですから、断る理由はまったくありません。

4. 結語：間の悪い男の歴史

とはいえ、何事にもタイミングというのは不可欠です。これだけの知的基盤を持つペリーですから、慶應義塾大学部英文科の求める理想の人材像「該博な文学者よりも役に立つ英語を面白く教えられる先生」に甘んじられるわけがないでしょう。受講者も数名にすぎず、当時の学生たちは文学よりも政治経済に関心があったから、学識あふれる英文学の講義など全く期待していなかったのです。

一方、このころ、ペリーよりも 8 年も早い 1890 年に来日して 1896 年から東

京帝国大学で英文学を講じ評判を取っていたのが、日本に帰化していたギリシャ系アイルランド人ラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲です。父方はペリー提督の、母方は建国の父祖ベンジャミン・フランクリンの血を引き、ボストン上流階級の知的貴族たちと交遊してきた白人エリートと、北米ではシンシナチで黒人女性と事実婚の経歴すら持ちニューオーリンズではヴードゥークイーンの取材までこなし、日本では出雲松江藩の小泉節子と契りを結んだ多文化的インテリとでは、日本文化の受容も日本人への訴求効果も全く対照的というほかありません。永劫の旅人ラフカディオ・ハーンが東大英文科の講師として大人気を博した一方、大秀才ペリーは慶應義塾での教育には失望し、最終年度などは授業もほとんどしなくなります。武藤脩二も『世紀転換期のアメリカ文学と文化』（2008年）で評するように、そもそもこの人事は最初から「そもそも場違い、ミスキャスト」だったのです。武藤はこれを、ハーバード大学における契約更新をせず、以後 17 年も経ってから取ってつけたように慶應義塾の職をあてがおうとしたチャールズ・エリオット総長の人事上の「失敗」と断じています（20-21 頁）。たしかに、多くの外国語に精通し、本の虫であるばかりか、比較文学や進化論的文学史も難なくこなし、新たなアメリカ作家の才能を見出す名伯楽でもあったペリーの任期延長をせず、彼にふさわしい学問研究環境を保証しなかったことは、ハーバード大学自体の過失にして損失でしょう。

歴史に「もしも」は禁物ですが、ペリーが来日した 1898 年には、もしも在籍していればすでにスペンサーにも馴染んでいて最大の教え子になったかもしれない野口米次郎（ヨネ・ノグチ）がいました。けれども全く同じこの年のノグチは、すでに渡米して 5 年が過ぎ、第一詩集『明界と幽界』（1896 年）が「シカゴ、ボストン、ニューヨークの詩人たちと対抗しうる西海岸の大型新人の登場」と高く評価され、1898 年には第二詩集『谷の声』を刊行するばかりか、小雑誌『トワイライト』まで編集発行しています。逆に言えば、もしもペリーの来日があと 5 年早く、野口の指導に当たっていたとしたら、ロマンティシズムの継承者、モダニズムの先覚者としての国際詩人ノグチは生まれず、文学史は変わったかもしれません。そして、のちにノグチの若い同僚として 1920 年代に英国へ渡り、1925 年には同地にて英語詩集 *Spectrum* を出し、のちにモダニズムの理論的指導者エズラ・パウンドの推挙によってノーベル文学賞候補となる西脇順三郎の方向性も、いささか微妙なものになっていたかもしれません。

これが具体的にどういうことかと言えば、ヨネ・ノグチも西脇順三郎も、いわゆるロマンティシズムを存分に吸収した上でモダニズムの時代を生きた詩人であったので、ペリーの信奉したスペンサー流の進化論的歴史観とは根本から相容れなかったということです。世紀転換期にはすでに、ジャポニズムやアフリカ系黒人芸術を貪欲に摂取して、モダニズムへ至る道が耕されていました。リアリズムを愛するペリーの進化論的文学史が近代国家ならではの直線的かつ通時的な文化の発展を前提にしていた一方、エズラ・パウンドや T・S・エリオットから西脇順三郎へ至るモダニズムの旗手たちは、目の前に全ての文学史的伝統が同時存在しているような共時的文学の同時存在秩序（simultaneous order）のネットワークを体現し、伝統とともに文学史の概念そのものを大胆に変革し始めていたのです。このモダニズム的共時的文学史の果てに、ポストモダニズム的に文学と歴史を創造的に横断する新歴史主義的文学史が発展したのでしょう。その過程において、モダニズム以前のリアリズム文学に寄り添った進化論的文学史はすっかり忘れ去られてしまいました。ただ、ここではたと気がついたので注釈的に付け加えますと、リアリズム、モダニズム、ポストモダニズムと続く文学史というのは、フレドリック・ジェイムソンがまとめた市場資本主義の時代、独占資本主義の時代、さらには多国籍資本主義の時代に対応していることですね。

まとめましょう。マシュー・ペリー提督はまさに「明白なる運命」のスローガンが鳴り響くアメリカから黒船で来日するという絶妙のタイミングを得て、みごと近代日本の時代を開きましたが、他方、提督の甥の子である稀代の英文学者トマス・サージェント・ペリーはそのタイミングの悪さによって独特の進化論的文学史を我が国の英文学研究、とりわけ慶應義塾の英文学教育にいささかも植え付けることのないまま、アメリカへ帰国しました。本日のテーマが「文学と歴史」と聞けば、文学が歴史に何か影響を与える可能性や、歴史が文学へ何らかの影響を与える可能性を想像する方も多いかもしれません。しかしトマス・サージェント・ペリーの場合は、自身のリアリズム文学史を確実に育んでいたにもかかわらず、日本ではむしろ「何もしないこと」「何者にも影響を与えないこと」によって、モダニズム文学史の可能性が生じる余地を積極的に与えたのです。

質疑

小平先生

先ほど話し残しました２～４の論点をまとめて、巽先生のお話に近づければよいと思っております。

今、福沢の大変ダイナミックな活動が捉え返され、トマス・サージェント・ペリー（Thomas Sergeant Perry）の知られざる影響について教えていただき、大変興味深く伺いました。取り上げられなかった歴史の発掘について、大変広範なお話に釣り合うものを私が用意できるわけもありませんので、慶應であるという共通点でわずかにつながっているということと、また、福沢の積極的なアメリカ受容とペリーの来日の非常なる不遇という対照、そのことに予見される日米の、すなわち日本から見たアメリカに対する不幸な関係に連なる作品を、簡単に２つご紹介して歴史の話につなげていきたいと思います。

一つは安岡章太郎の『流離譚』（1976 ～ 1981 年）です。こちらはとても長いもので、明治維新期の土佐の安岡家の人々の移動の有様を、安岡家に伝わる日記や手紙を中心に読み解いたものですが、土佐勤皇党への参加ということを扱いながらも、歴史上の大きな人物ではなく、武士の中でも差別された郷士の視点から、維新のなかでのずっと「アテはずれ」な活動・移動を描いたものです。これは明治維新を扱っておりますけれども、近代国家として何かを成し遂げた起源というわけでもありませんし、また、負けた理由というわけでもありません。一貫して、いかにして自分が空白になったかにこだわって書いたものだと言えるでしょう。

そしてこれは、残された資料が少ないということによるだけでなく、ヨーロッパやアメリカに対して従属的な関係を結んだと自覚されるその位置に関わって、自身と日本人のアイデンティティの空白を覗きこんだ、小説にして歴史の探究であったと思います。安岡は、よく知られるように、敗戦後にアメリカのロッ

クフェラー財団に招かれ、このあたりは巽先生にお聞きした方がよい事柄ですが、アレックス＝ヘイリーの『ルーツ』などに影響を受けて問題意識を強くしました。ここには── 前半の話題と関連しますが ── 過去の明治維新を想起しながら、そこに敗戦後を見直していく、合わせ鏡のような構造が見出されます。

そして、その際に重要なのは、歴史、文書を読み探求していく〈私〉── 現在を考える主体として重要なわけですが ── しかし、その語り手としての〈私〉が全き存在感を発揮しないという特徴があります。いろいろ想像的な光景によって歴史の空白を埋めていきながら、その確固とした証拠を得られず、〈私〉という語り手は定まらない空白のままです。そこにはヨーロッパやアメリカから学んだといわれている近代小説における〈私〉が、構築されたものにすぎない、ということの暴露も重層的に示されているのではないかと思います。

少し時間を飛ばさせていただきまして、この作品と全く立場は異なりながら、「想起」という「合わせ鏡」ということと、〈私〉の空白という点が重なる小説が、慶應出身の作家である赤坂真理の『東京プリズン』（2010 ～ 2012 年）です。こちらも東京裁判を、アメリカ留学中の女子高生 ── 赤坂真理自身の若いときであるかのように描かれるのですが ── が参加させられるディベートを通じて捉え直し、天皇の存在を考え直す小説です。母親が東京裁判で通訳をしたということをきっかけに、清算できなかった戦争責任と清算できていない母と娘の関係が、合わせ鏡のイメージで、というより実際に鏡の向こうの世界としても描かれます。

日本語と英語の往還の中で、どうしても英語で〈I〉と語りだせない主人公は、戦後 ── 戦後といってもずいぶん時間が経ってはいますが ── ずっと何か隠されたことがあることに気づきます。私＝I は 2010 年代に至るまで機能せず、〈私〉は空虚の象徴とされています。ただし、機能しないことを他者とつながれるような装置として捉え直していくのがこの小説の特徴です。

本作は、発表当時物議を醸しました。秀逸な構成と問題意識について、私も、これ以上の書きようはないだろうと感銘を受けたと同時に、若干の違和感を持った一人なのですが、というのは、自分が他の人々とつながるということを、主人公が天皇にもなり代わるというように、つまり、〈私〉という空虚な入れ物を媒介にしてつながっていき、それが、母と娘を貫く女性の視点として、アメリカに対置される構図があるからです。しかも、それを物語であるという自覚を持って

行っていることに違和感がありました。

ただ、ともあれこの作品は、述べてきたような失われた歴史との文学の向き合い方を提示したという点に意義のある作品なのだと思います。失われてしまった〈私〉や歴史を問題にする際、残っていないものについて幻想としてしか語れないという切実さが、文学の語る歴史のリアリティなのだと言えると思います。実際、この『東京プリズン』では幻想的シーンというのが非常に多く使われています。

先ほどの巽先生が、注目されなかった歴史を掘り起こされる際に、研究としての実証性を確保されていることはもちろんですが、眼を転じて文学作品を見た時、歴史に向かう際に、幻想を通してでなければ考えられない事例や作家というのがあるのではないかと思います。その点について何か事例やお考えなどがあれば教えていただきたいと思いました。また、これは吉永先生にも、これは幻想に限らないのかもしれませんが、歴史の、変形も含めた受容という観点で何かお示しいただけることがあればお伺いしたいと思った次第です。これで終わりにします。

条川先生

小平先生ありがとうございました。文学と歴史というテーマを考えるとき、もう一つ重要な〈私〉という問題があるわけですが、小倉先生のお話でもジャブロンカのところなどで歴史家でありながら〈私〉という場所を手放せない歴史家が現在のものとして出てきているというお話でございましたが、改めて提示していただいたと思います。また、非常に興味深いご質問もいただきましたので、後ほどまた触れていただきたいと思います。それでは吉永先生にコメントをお願いできますでしょうか。

吉永先生

大変興味深く拝聴いたしました。慶應のモダニズムから漏れたトマス・サージェント・ペリーが消滅する媒介者、不在による影響という非常に刺激のある指摘で、なるほどと頷かされました。また当時の慶應がどのような人材を求めていたのかということも存じておりませんでしたので、その点も非常に面白く伺いました。私の方からは中国文学との関連で考えたことを少しお話してお伺いしたい

と思います。

福沢諭吉前後、明治維新から明治にかけての時期は、中国も日本を追いかけるように近代化をしていた時期で、わずか10年のうちに8000人もの留学生を日本に送り込んでくるほど、ひっくり返っていた時代です。その頃の中国で文学、あるいは歴史を叙述するための文学という器という点から見ると、メディア側の根本的なパラダイムシフトが起こっておりました。そもそも、先ほどご紹介しました通り、小説というのは中国の文芸のなかでは非常に地位が低かったのですが、その小説のなかでも地位が最も低いのが白話小説と呼ばれる口語体の小説でした。これは要するに、講釈師の語り物や演劇のセリフのような文体ですので、学問が無くても読むことができるものとして、非常に地位が低いのです。しかし通俗であるということは、裏返せば支持する人が非常に多かったメディアであったとも言えます。日本でも言文一致の運動が起こりましたが、中国でも清末から中華民国に移るときに、白話小説をメインにしよう、これで全ての文章を綴ろうという運動が徹底的になされることになります。ちなみにスライドで少しお示ししているのは、著名な文学理論家である陳平原氏が提示している内容なのですが、『三国志演義』や『水滸伝』などに代表される白話小説のジャンルは、ジャーナリズムが勃興してきた清代末期にはその内容が本質的に変わってきているという指摘がございます。それを陳平原氏は三つに分けて論じています。

まず一つは、中国語からそのまま取ってきたような表現になりますが、「叙事時間」です。古典世界の白話小説は「連貫叙述」、つまり時間順にスタンダードに描写していくのですが、近代化されると倒置が起こったり交錯して入れ替わったりする叙述が起こります。我々が普通に小説でイメージする技巧だと思いますが、それが取り入れられました。二つ目の「叙事角度」は、それまでは全知全能の視点からの叙述が主流でしたが、そこに一人称・三人称による「制限叙事」という視点が加えられた形式がもたらされたことを指します。また、形式の変化に伴い、内容的に最も大きい変化として、三つ目の「叙事構造」という指摘があります。それまではプロット中心であったのが、ここに至ってようやく、人物の性格や雰囲気の描写が本格的に成立していきます。実は、中国の古典小説はキャラクターの性格が全く変わらないので、フラットなキャラクターと文学史では呼ばれております。どんな事件が起こっても、事件前と事件後で登場人物の本質が変わらないので、同じ失敗を何度も繰り返して盛り上がっていくわけです。例え

ば、有名な『西遊記』では、三蔵法師と言うのは非常に聡明で徳の高い人物なのですが、いつも妖怪に騙されます。孫悟空が「お師匠さん、あれは妖怪ですよ」と見破っても、「お前はそうやってすぐ人を疑う、お前は破門だ」と言って破門にしてしまい、すると妖怪に食われかかって「悟空助けておくれ！」ということになる、という繰り返しが延々と続く物語なのです。我々からすれば、とても知恵があるとは思えないのですけれども、このようにフラットな登場人物が主流であったのが、清末以降、キャラクター（登場人物の性格や性質）が変わってゆく近代的な小説がようやく成立していきました。そうした展開のなかで白話小説というものの地位が劇的に上がってきたという背景があります。

その上で、今日のお話と関連して考えたことをお伺いしたいことがございます。清末に梁啓超という著名な人物がおります。中国の近代にジャーナリズムを根付かせようとして、それを政治・思想・教育に普及させようと意図的に展開した人物です。彼は、清朝における科挙という超難関の国家試験に通っている人物なので、最後の科挙官僚であり、為政者側の人物でありますが、何事も政治と不可分な中国においては、彼の肩書は大量にあります。革命家であり、政治家であり、歴史学者であり、思想家である、ということになります。梁啓超は、世界史でも習う有名な康有為という人物とともに変法自強運動、すなわち国家を変えて西洋化をしながら中国を立て直そうという運動をします。その際に選択した方法は立憲君主制であり、上からの革命を目指しますが、最終的に処刑されてしまいます。一連の顛末は、「戊戌政変」「百日維新」などと呼ばれます。この梁啓超がジャーナリズム形成に際して依拠した基本的思想は、当時中国に輸入されていたダーウィンの「進化論」であり、またそれに基づいたスペンサーの「社会進化論」の理論を援用しています。

ここで、今日の巽先生のお話でスペンサーの歴史観と文学史ということを伺い、そこに重なって思ったことなのですが、梁啓超が中国に紹介しているスペンサーの進化論は、基本的には自由・独立・科学ということを尊重しているという点が、特色として指摘されております。科学的判断を非常に重要視するのは当たり前と言えば当たり前のようなのですが、中国では、これはもしかしたら中国の固有の変更かもしれませんが、そうすると科学的でないものへの排斥がすさまじくなるわけであります。それまで重視されていた古典の否定が、今度はものすごく極端に進んでしまいます。そうすると新旧の対立で、古きものは悪しきものと

いう構図が徹底されます。ここからお伺いしたいことなのですが、中国でこの時代の文学史というものが編纂されたときには、ぱっと思いつく限りでは、ジャンルを横断して、取捨選択が公平で広範囲なものがあまりないのではないか、と思われました。白話文学に関する研究や文学史は、この時期に大量に進んでおります。例えば、魯迅は政治家であり、革命家でもありましたが、政治的な危機に陥ったときには文学研究に埋没しておりまして、その時に専門家も裸足で逃げるような古典研究の業績を残しております。その成果は今でも基本文献になっているのですが、それはやはり白話小説の研究です。中国文学のなかでも、詩、散文、賦などの様々な古典作品は悪しきものだ、という理由で、この時期には触れてはいけないような傾向が非常に強かったのではないかと思います。それに対して、先ほどお話を伺っていて思ったのは、日本で欧米のスペンサー的な進化論に基づいた文学史観や歴史観が形成された時に、そこでの主題というか取捨選択や議論の公平性というものは、── 公平性と言うのは私たちの観点になってしまいますが──、そのようなものは何らかのバランスがとられていたのか、あるいは中国のように非常に突出した状態に一度振り子が降り切れていたのか、存じておりませんので教えていただければと思います。また小平先生からご質問いただきました歴史の変形というか受容については、もしまたお時間があれば後ほど触れさせていただければと思います。以上です。

応答

粂川先生

それではまず、コメンテーターの小平先生と吉永先生にいただきました質問に対して、小倉先生と巽先生にお答えいただくところからさらに進めてまいりたいと思います。小倉先生へのご質問のひとつは、文学と歴史学、さらに文学史の問題、をお尋ねいただいております。そして吉永先生の方からは、ジャブロンカの仕事が一般の読者にどのように受け止められたかというご質問を頂いております。

小倉先生

小平さんから二つのご質問があったと思います。今日の 19 世紀の話においては、特に 19 世紀前半少なくともフランスに関する限り、文学と歴史学が幸福な共同戦線をはれた時代、ということを強調したという側面が確かにあります。ただ同じ 19 世紀でも後半から特に末になると、（先程触れた）その歴史学が、ソルボンヌ大学を中心として制度化されます。その背景には、当時フランスの政治体制は第三共和制であったという点が関係します。第三共和制というのは公教育を制度化して、その公教育を通して市民道徳や国民精神を子供達に植え込むことを目指した時代だったからです。そうした中で、歴史学という学問にはそれ以外の学問以上に、極めて強い政治性が付与されます。歴史学がそのような形で確立したと同時に、文学史そのものもまた制度化されていきます。フランスではちょうどこの時代に、フランスにおいて文学史を確立したと言われるギュスターヴ・ランソンによる「文学史」が登場します。つまり、ランソンとソルボンヌの歴史学の制度化が時代的にほぼ重なるわけです。おおよそこの時期から、学問の世界では、そして大学教育の世界では、文学と歴史研究のあいだにかつて存在したロマン主義的な蜜月状態がなくなっていきます。

ただ、(私は今日 20 世紀の話は全くしませんでしたが)、20 世紀において、文学と、学問としての歴史学がいつでも乖離していたかというと、必ずしもそうでもないような気もします。例えば先ほど少し触れたアナール学派 —— このアナール学派は文化史の端緒を拓く訳ですが —— 彼らにとっては歴史を考える上で文学作品はかなり大きな意味を持っていました。一番わかりやすいのはリュシアン・フェーヴルというアナール学派の創始者の一人が、16 世紀の作家ラブレーについての本まで書いているくらいですから、やはり歴史学の側から全く文学を切り離す風潮でもなかったのではないか、という気がしております。

それから 20 世紀後半になって —— これもフランスの特徴かもしれませんが —— 歴史家だけではなくて哲学者や社会学者も文学への強い関心を示し、本格的に論じます。フランスはいい意味でも悪い意味でも、文学あるいは文学者の社会的なステータスに対する認知度が高いのです。これは私の個人的な意見ですけども、フランスの場合は立派な哲学者でも歴史学者でも、ある段階で文学の誘惑に駆られるというか、みずからの文学的なパフォーマンスを示せることが、知識人の存在理由のようになっている感じがします。例えば、現代フランスを代表する歴史家アラン・コルバンなんかも文学作品を利用しています。最近は、「感情の歴史」とか「情動の歴史」が注目されつつありますが、そうした歴史研究の領域では、小説や詩だけでなく、むしろ日記や自伝や手紙など、本来プライベートな言説として書かれた、出版を予期されていなかった(20 世紀の作家はそうでもないですけども)テクストが非常に注目されています。ですから、文学と歴史学の関係は、時代によって距離が広がったり縮まったりします。

二つ目の質問は、そうした中で現代において文学史がどのように構築できるのか、というご質問だったと思います。これは日本やフランスのみならず、世界中の問題だろうと思います。先程、巽さんのお話の中にアメリカ文学史が成立したのは 1920 年代だったという話がありました。フランスは先ほど申し上げたように、ランソンという人が、1880-90 年代ぐらいに一応は文学史の枠組みを作り上げます。その伝統が現代に至っておりますが、確かにここ 20 ～ 30 年程のフランスでは、やはり文学史をどのようにして新しく作り直すかということは大問題で、幾つかの異なる文学史が書かれてきました。その中で(この点については巽さんが詳しいですが)、文学的なカノンがどんどん見直されていく訳です。それからジャンルそのもののカノン性も、だんだん見直されていきます。かつての

文学史であれば、詩があって、小説があって、戯曲があって、評論があるのが通常でした。しかし現代の視点でいえば、「私」を語るエクリチュールである「自伝」とか「日記」も含まれて当然だと思います。ヨーロッパで言えば、ルソー以降自伝は連綿と書かれてきたのですけども、実は今から三十年ほど前までのフランス文学史においては、自伝が独立した項目として出てきません。ルソーやスタンダールやサルトルがすぐれた自伝を書き残したのに、詩や小説のようにひとつのジャンルとして独立した形で自伝の歴史が語られるのは、文学史では比較的最近のこと、という気がします。もちろん近年出ている文学史では、しっかりと一章が設けられていますが。

もう一つの特徴としては、作家や作品の歴史ではなく、広い意味での文学を取り囲む様々な制度の歴史 —— 例えば出版や教育制度の歴史など —— そうしたものが文学史の中に積極的に取り込まれています。その意味では、社会学者たちの影響は絶大です。

また、これは特にアメリカやイギリスやその他のヨーロッパの国と比べてフランスの特徴かもしれませんが、フランスは文学におけるフェミニズム研究やジェンダー批評がおそらく相対的に遅れた国です。理由はいろいろあり、またそのことに対する反抗・異議申し立ては当然あります。実は、まさに今年（2020）、女性だけの文学史『女性と文学』という（私が今、手元に持っているこの本なのですが）、女性文学を一つの文化史に纏めた本が出ました。上下合わせて 1500 ページくらいあります。ポケットブックなのですが、これがやっと今年出ました。言ってみれば男のいない文学史を、女性の研究者たちが作ったという例です。こうしたものも、ひとつの文学史の書き方として新しい立場表明なのかもしれない、という気がいたします。

それから、吉永さんもご質問ありがとうございました。方法としての物語について、私が先ほども言及したジャブロンカが、これも翻訳がありますが、『歴史は現代文学である』という一種の理論書を出しています。この本は、ジャブロンカが『私にはいなかった祖父母の歴史』を書いた約二年後に書いた本で、自分が歴史書で実践した方法論を、改めて理論的なマニフェストとして明らかにしたものです。

その中で、「方法としての私」、「方法としての物語」という概念をあらためて提示しています。ジャブロンカの『私にはいなかった祖父母の歴史』は、いくつ

もの学術賞を受賞しております。歴史書としての方法論、そしてまた叙述のスタイルが歴史学会で高く評価されたというのは事実です。『歴史は現代文学である』も、賛否両論も含めてやはり評判になっており、日本語で読めるのはとても幸いなことだと思います。

では影響はどうか。どちらも新しい本なので、世代の影響を体系的に語ることは難しいかもしれません。しかし、影響とまではいかなくとも、ジャブロンカとほぼ同世代の歴史家の中には、歴史書と文学書の境界領域で著作を書いている人たちが目立ちます。いずれも非常に才能ある歴史家たちです。彼らはまずはじめ、ソルボンヌ大学等において、歴史家になるための伝統的な素養を積み、教育を受けます。最初は博論として歴史書の見本のようなものを書きます。ただその執筆から 10 年たち 15 年たち、40 代、50 代くらいになった段階で、そこから少し離れたような著作を、ジャブロンカが書いたような「方法としての私」「方法としての物語」を登場させるような作品を書くようになっています。私はこれが一つの流れなのかなと感じています。

その具体例として最後に、同じ世代に属するアントワーヌ・ド・ベックという歴史家について話します。（彼の著書は日本語訳がありませんが）ベックはもともとフランス革命史の専門家でした。文字通りフランス史の王道的テーマから始めた人です。このベックが、数年前に『アルプスのクレチン病患者の歴史』（2018）という本を書きました。クレチン病とは甲状腺ホルモンが足りないせいで、身体的・知能的な発達が妨げられてしまう病です。本書は、19 世紀を背景として、クレチン病がどのように認識・克服されていったのかを、比較的オーソドックスな手法で描いた歴史書です。

ところが、それから数年後（2020 年 2 月）、同じベックが『ウージェニー』という小説を出しました。主人公ウージェニーがこのクレチン病の患者です。つまり、歴史家であるベックは、数年前に歴史書として書いたそのクレチン病というテーマを、今度は改めて小説という形で取り上げたのです。

理由は分かるような気がします。というのも、その歴史書の中では、クレチン病患者（これは若い女性が多い）には、全く言葉がありません。文字通り、知能が発達してないが故に、言葉も口にできないのです。字も書けない。何を考え、何を思っているのかも周囲の人間にはよく分からない。それを認識するのは歴史書の中ではひたすらに、精神病理学者や行政官たちです。逆に、そのクレチ

ン病の当事者たちの内面性はまったく不透明であり、文字通り言葉を奪われた存在達です。

ベックは小説の中で、ウージェニーというクレチン病患者のヒロインを登場させます（勿論仮名です）。そして同時に、そのクレチン病患者の女の子と接する医師の青年を登場させます。その青年の目を通して、できる限りウージェニーというクレチン病患者の「沈黙の言葉に耳を傾ける」── ジャブロンカに「歴史というのは沈黙のさざめきに耳を傾けることだ」（『私にはいなかった祖父母の歴史』）という美しい言葉があります── ベックもまさにその行為を実践します。つまり、その医師の青年はウージェニーというクレチン病患者の「沈黙のさざめきに耳を傾ける」。著者はいわば、歴史の不透明性に対して、何とか可視性を与えようとする試みを── あくまで小説という形式において── 実践しています。ですから、ベックという歴史家による対象は同じであるが（クレチン病患者）、タイプの異なる二つの試みを読んだ際、歴史家の知的な営みが実によく分かる、という気がしました。こうしたことが、近年のフランスの歴史学に見られる現象です。なおこの点については、2021 年 8 月に刊行した拙著『歴史をどう語るか』（法政大学出版局）において詳述していますので、参照いただければ幸いです。

粂川先生

小倉先生、ありがとうございました。それでは、巽先生のレスポンスに移ります。小平先生の方からは、文学と歴史を考える上での幻想性についてのご質問を提示していただきました。そして、吉永先生の方からは、中国における文学史記述の問題状況についてお話していただきました。巽先生、その辺りに関しましてどうでしょうか。

巽先生

小平先生がご指摘くださいました安岡章太郎さんと赤坂真理さんは、共に本塾の生んだ文学者であり、非常に重要な作家だと思います。特に幻想性を通してでなければ考えられないケースをめぐっては、安岡章太郎がアメリカ的現実の深層に隠匿された黒人奴隷史に惹かれ、アレックス・ヘイリーの『ルーツ』（1976 年）を訳したことが参考になるでしょう。そこで描かれる残虐描写は、アメリカ初の黒人大統領が誕生して久しい現在の日常感覚ではとうていリアリティとは思

われないもので、ほとんどゴシック・ロマンスに迫るほどですが、まったく同時に、アフリカから連行された黒人奴隷の子孫である作家ヘイリーにとっては、西アフリカのガンビアにおける失なわれた起源を求める旅でもある。つまり、20世紀作家ヘイリーにとって18世紀以前の西アフリカの起源については幻視するしかなかったように、21世紀読者にとって南北戦争以前の黒人奴隷制については幻視するしかないのです。つまりここでは作家の幻視力と読者の幻視力という、二重の想像力が要請されているんですね。それをもたらした誘因としては、安岡が1960年代にロックフェラー財団の奨学金でアメリカ南部はテネシー州ナッシュビルにある名門ヴァンダービルト大学に留学した経験が大きい。テネシー州はヘイリーが幼年時代をすごした場所です。そうした特異な場所を得たからこそ、安岡は日本では自分が摑めなかった・捉えきることのできなかった黒人文化への想像力を、限りなく研ぎ澄ますことになります。

現在を代表するヒップホップ・ミュージシャンの一人であるケンドリック・ラマーなども、『ルーツ』の影響を受けて作品を作っており、ピューリッツァー賞まで取っていますが、その日本での普及に三田文学者で知られる安岡が介在したと思うと、非常に興味深い。黒人奴隷の歴史とは、アメリカの負の歴史です。南北戦争が終わり奴隷制度が撤廃されたとしても、それによって今度は奴隷の歴史が人種差別の歴史になり、これが現在のBLM（Black Lives Matter）にも繋がってくる。非常に逆説的な言い方になりますが、歴史の生々しい真実、とりわけ隠匿された歴史や敗戦国の歴史を知るためには、現代作家は幻視力をフル稼働させ、想像力をフル回転させなければならない。昨今では我が国でも、魔術的リアリズムを得意とする笙野頼子さんとか、久間十義さんとか古川日出男さんといった作家たちが活躍していますが、そこで総動員される幻視力、想像力は「ありえたかもしれないもう一つの歴史」という虚構を通して歴史的真実へ立ち至ろうとするものです。

吉永さんのご質問ですが、中国におけるダーウィンやスペンサーの受容についてのご意見、大変興味深く拝聴しました。先ほどは言いそびれましたが、日本におけるスペンサー受容においては、自由民権運動などの流れの中で、森有礼と加藤弘之、それから私たちの身近なところでいうと、福沢諭吉もスペンサーを外さずに読んでいます。実際に、『学問のすゝめ』はスペンサーを使っています。スペンサーの理論の中には、“equilibration”という概念がありますが、こ

れは「力の均衡」ということですね。吉永さんのご質問は、「バランス感覚」や「公平さ」とは、どのようなものだったのかということだったと思いますが、スペンサーはそうした概念を社会進化論的な力の均衡という視点から考え直していた。「散漫な同質性（incoherent homogeneity）から集結的な異質性 (coherent heterogeneity) へ」というスペンサー独自の進化論的歴史法則は、自然のみならず社会にも応用可能であり、それを例証するのが「軍事型社会から産業型社会へ」というモデルで、これがいわゆる文学進化論とでも呼ぶべき理論に影響を与えることになります。そこで肝心な役割を演じるのが、福沢が「力の平均」と訳す概念 “equilibration” で、これは、環境の変化に応じて、生物の側も種を破壊する力と保存する力を動的に均衡させ、環境に適応する能動的な能力を向上させていくという考え方に基づく。バランス感覚や公平さといった倫理的概念も、案外スペンサー的社会進化論の遠い帰結だったのかもしれません。